

中川運河再生計画

平成24年10月

名古屋市・名古屋港管理組合

中川運河

「歴史をつなぎ、未来を創る運河」 の実現を目指して



中川運河は、大正時代に将来の大物流時代の到来を見据え、名古屋港と旧国鉄笹島貨物駅とを結ぶ運河として建設され、昭和7年10月に全線開通し、今年でちょうど80周年を迎えます。

支線を含む延長が8.2km、最大幅が91mという大きさから、当時の新聞で「東洋一の大運河」と呼ばれました。中川運河が最も活躍した時期は、昭和30年代であり、名古屋は中川運河の下支えのもと発展してきました。その後、物流が舟運から陸運に移り変わり、現在では中川運河を行き交う舟の数は平均で1日数隻となっています。

一方で、都心に残された広大な水域として、従来からボートなどの水上スポーツが盛んに行われており、また、最近では運河と歴史をともにしてきた倉庫を利用した市民芸術活動が定着してきました。

こうした背景を踏まえ、このたび「歴史をつなぎ、未来を創る運河」を理念とする「中川運河再生計画」を策定しました。

これまで名古屋の暮らしとモノづくりの発展を下支えしてきた中川運河の歴史的役割を尊重しながら、都心と名古屋港を結ぶ広大な水辺に新たな価値や役割を見出し、うるおいや憩い、にぎわいをもたらす市民が誇れる運河へと再生し、子どもたちの世代に継承していきたいと考えています。

“どーんとまっすぐでキラキラ輝いとる”この中川運河を、是非、皆さんとともに、もういっぺん、東洋一の大運河にしていきたいと思います。

なお、この計画の策定にあたり、貴重なご意見をお寄せいただいた市民の皆さま、熱心にご議論いただきました中川運河再生検討委員会の委員の方々に対し、心より感謝申し上げます。

平成24年10月

名古屋市長 河村たかし

昭和7年に全線開通し、本年で80年目の節目を迎える中川運河は、昭和26年から名古屋港管理組合が管理し、臨港地区に指定された運河の沿岸地は港湾施設として土地利用を図り、旧国鉄笹島貨物駅と名古屋港を結ぶ水運による港湾物流の軸として、県民市民の皆さまの暮らしや名古屋圏のモノづくり産業を支え、名古屋港の発展に貢献してきました。



しかし、昭和40年代以降の水運から陸運への物流形態の変化などにより、運河から「はしけ」の姿も消え、今では1日平均数隻の船が行き交うほどとなりました。

このため、平成5年に名古屋市と共同で策定しました「中川運河再開発基本計画」に基づき、運河の再開発に取り組んでまいりましたが、計画策定後長期間が経過し、その後の運河を取り巻く社会情勢が変化してまいりました。

このような背景を踏まえ、中川運河の歴史を尊重しつつ、都心と名古屋港を結ぶ広大な水辺に新たな価値や果たすべき役割を見出し、この度、「中川運河再生計画」を策定いたしました。

この計画では、概ね20年先を見据えた再生構想と、概ね10年間の取り組み内容を示しており、県民市民、企業、学校、行政等の協働により計画を進めるための指針としても活用してまいります。

今後は、地域の特性や状況を踏まえながら、都市の貴重な水辺、憩い・うるおい空間や、より価値の高い産業空間をめざし、運河沿岸地を有効に活用し、水辺を活かしたまちづくりに貢献するとともに、ささしまライブ24地区やガーデンふ頭など、都心と港の交流拠点をつなぐ、新たな水運の軸として役割を果たすなど、運河の再生に全力を尽くしてまいります。

県民市民の皆さまを始め、運河再生に係わる全ての方々におかれましては、この計画の趣旨をご理解いただき、計画の推進にご協力くださいますよう、心よりお願い申し上げます。

最後になりましたが、本計画の策定にあたり、ご協力いただきました中川運河再生検討委員会の委員各位をはじめ、県民市民、企業等の皆さまから貴重なご意見・ご提案をいただきましたことに対し、深く感謝いたします。

平成24年10月

名古屋港管理組合管理者 **大村秀章**

第1章 再生計画策定の目的と位置づけ	1
1 再生計画策定の目的	
2 再生計画の位置づけ	
第2章 中川運河の概要	3
1 中川運河の沿革・歴史	
2 中川運河の利用の変化	
第3章 再生計画策定の視点	11
1 中川運河を取り巻く環境の変化	
2 関連計画における中川運河の位置づけ	
3 基本計画の進捗状況	
4 再生計画策定の視点	
第4章 概ね20年先を見据えた再生構想	27
1 再生理念	
2 再生方針	
3 空間計画	
第5章 概ね10年間の取り組み内容	53
1 再生方針ごとの取り組み内容	
2 ゾーンごとの主な取り組み内容	
第6章 再生に向けたたくみ	73
1 再生の基本的な進め方	
2 再生に向けたたくみ	
資料編	79

中川運河再生計画の全体像

第1章 再生計画策定の目的と位置づけ

- 1 再生計画策定の目的
- 2 再生計画の位置づけ

第2章 中川運河の概要

- 1 中川運河の沿革・歴史
- 2 中川運河の利用の変化

第3章 再生計画策定の視点

- 1 中川運河を取り巻く環境の変化
- 2 関連計画における中川運河の位置づけ
- 3 基本計画の進捗状況
- 4 再生計画策定の視点：
視点1 人と人、人と運河のつながりの創出・強化
視点2 環境に配慮した空間の形成
視点3 新しい時代の産業動向への対応
視点4 安全・安心なまちづくりへの貢献
視点5 周辺地域の動向と連携した沿岸用地の土地利用
視点6 再生を効果的に進めるためのしくみの構築

第4章 概ね20年先を見据えた再生構想

- 1 再生理念：歴史をつなぎ、未来を創る運河
～名古屋を支えた水辺に新たな息吹を～
- 2 再生方針：
方針1 【交流・創造】人と人、人と運河をつなぎます
方針2 【環境】水・緑・生き物に親しめる水辺空間を形成します
方針3 【産業】モノづくりの未来を支え続けます
方針4 【防災】まちの安全・安心を支え続けます
- 3 空間計画：
◆にぎわいゾーン
◆モノづくり産業ゾーン
◆レクリエーションゾーン

第5章 概ね10年間の取り組み内容

- 1 再生方針ごとの取り組み内容
- 2 ゾーンごとの主な取り組み内容

第6章 再生に向けたしくみ

- 1 再生の基本的な進め方
- 2 再生に向けたしくみ

第 1 章

再生計画策定の目的と位置づけ

1 再生計画策定の目的

中川運河は、名古屋港と都心を結ぶ水運による物流の軸として、昭和の初めから名古屋の経済・産業の発展を支えてきました。

その後、運河の水運物流の減少を背景に、中川運河の果たす役割を見直し、平成5年に名古屋市と名古屋港管理組合で基本計画（名古屋市では「中川運河整備基本計画」、名古屋港管理組合では「中川運河再開発基本計画」としています。）を策定し、以降、この基本計画に基づいて整備を進めてきました。

しかし、基本計画策定から20年近くが経過し、少子高齢化の加速と人口減少の進展、大規模地震や津波など安心・安全に対する危機感の増大、地球環境問題の深刻化、「個」の時代における新たなつながりへの期待など、社会をとりまく新たな課題を踏まえて、中川運河のめざすべき姿と再生の方針を再検討することが必要となってきました。

また、この間、名古屋市の将来のまちづくりの基本方針や諸計画、並びに名古屋港の整備等に関する諸計画が策定されており、今後は、これら関連計画における中川運河の位置づけを反映して取り組んでいく必要があります。

こうした背景を踏まえ、中川運河の歴史を尊重しつつ、新たに求められる価値や果たすべき役割を見据えた「中川運河再生計画」を策定しました。

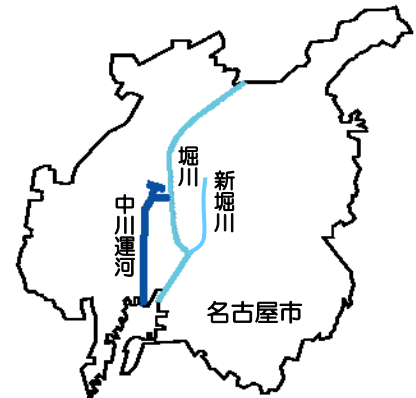


図 1-1 位置図

2 再生計画の位置づけ

中川運河再生計画は、中川運河を取り巻く環境の変化や名古屋市及び名古屋港管理組合策定の関連計画を反映するとともに、基本計画の進捗状況を評価し、見直しを行ったもので、概ね20年先を見据えた再生構想と、概ね10年間の取り組み内容で構成しています。

この計画は、市民・企業・学校・行政等の協働により中川運河の再生を進めるための指針としても活用します。

計画の対象範囲

計画の対象範囲は、中川運河（北・中・南幹線、北・東支線、堀止船だまり、中川口はしけだまり）、横堀（小碓・南郊・荒子川・港北運河）の水域及び中川運河の沿岸用地です。

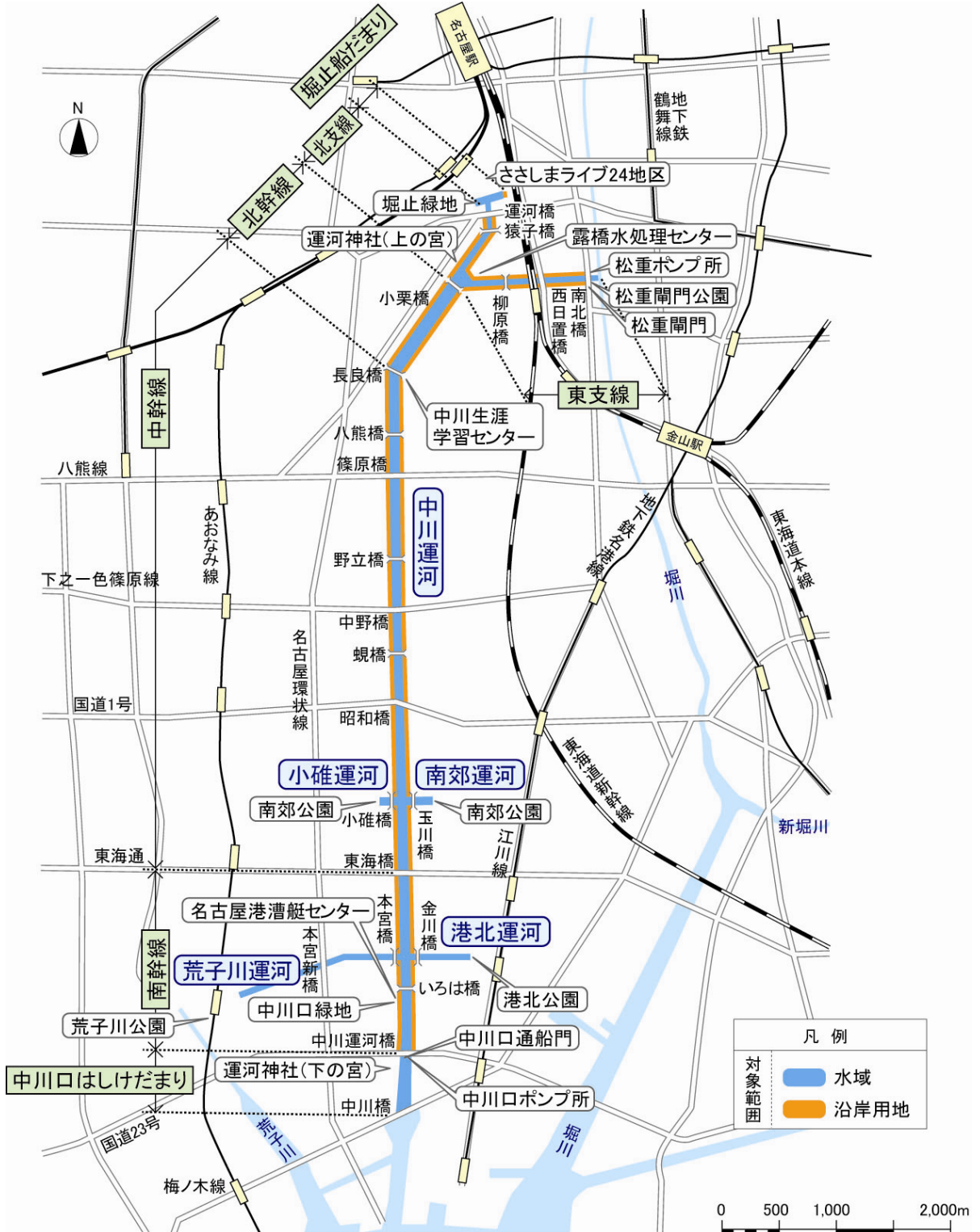


図 1-2 計画対象範囲